

春彼岸追悼廻向文

敬って真言教主大日如来金剛界会三十七尊
くえまんだら しょうじゅ
九会曼荼羅諸尊聖衆、安養寺本尊薬師瑠璃光如来、当観音堂観世音菩薩に白して言さく。

けいだい ちんちようげ
安養寺境内に沈丁花がかわいらしい花をつけた。もう紅梅の花は散りはじめた。一雨ごとに枝という枝には、すがすがしい新芽をつけている。

せいめい いぶき しゅんこう
生命の息吹をひしひしと感じる。春光はさんさんと輝いているなかで令和二年の春彼岸を迎える。
さんかんしおん
三寒四温を越え、ようやく「暑さ寒さも彼岸まで」のとおり自然の季節は間違いなく春彼岸を

はっしょう
もたらず。時節は新型コロナウイルスの発症か
そうぜん
ら感染拡大防止で騒然としている。全国の小中高校は一斉休校、関西の春を呼ぶ大相撲の大阪場所は異例の無観客で始まっている。選抜高校野球も
しかりで同じく無観客から遂に中止が決断され

る。音楽や演劇の公演は中止され、展示施設の休館が相次ぐ。演者や劇場、博物館などが無観客でライブ配信をしたりブログで展示品を紹介する動きが広がっている。いずれも再開の見通しは不透明で、自宅で映像や画像を楽しむ模索が続く。世界の観光都市京都も入洛者ガタ減りで、がらんとした状況にコロナウイルス出現以前の賑わいが幻の如く思われる。

さてここに弘法大師の著書「般若心経秘鍵」ひけんに

今日の日本と同じような状態が書かれている。改めて拝読・披見すると、「天下大疫する」から始まる。「平安時代弘仁九年（八一八）に疫病が大流行する。時の嵯峨天皇が、ご心配になり、自から筆

をとって、紺紙に金泥きんでいでもって、『般若心経』一卷を書写しよしやされた。この時、弘法大師は『般若心経』

の講読こうどくの役を仰せつかり、この經典の内容をまと

めあげて講こうじる。まだその講こう賛さんの結願けちがんの言葉を述

べない前に、病人が全快して街にあふれ、さらに

ぜんかい まち

夜に太陽が赫々と照る異変も起った。このような

かっか

かい とくぎょう

奇跡が起きるのは、決して「私の戒を保つ徳行の

せいではなく、ひとえに天皇のご信仰の功德によ

るものだ」と弘法大師は天皇を讃えられ、

た

上表文として著書「般若心経秘鍵」に記るされ
ている。

じょうひひょうぶん

この時の嵯峨天皇の『般若心経』写経をみだり

ちよくふう

に開閉できない刺封心経として伝え保存してい

さがごしよ

るのが嵯峨御所・真言宗大覚寺派大本山大覚寺

(京都市右京区嵯峨)である。

あんのん

このように弘法大師は国家・国民の安穩を常に

心にされ、人々の苦しみをわが苦しみとされ、

さいせいりじん

そうごうらいはい

そうごうくよう

濟世利人、相互礼拝、相互供養の真言密教を確立

されている。

せいがん

この請願の相互供養のなかで、とくに亡き人も

みな

かいぐじょうぶつどう

含めた皆ともに「皆共成仏道」が仏道の目的である。亡き人の場合、お墓や仏壇を通して亡き人と対話する祖先崇拜の伝統を受け継ぎたい。このため、春の彼岸中の春分の日は、新憲法下でも、「亡

うやま

き人を偲び、祖先を敬う日」と定め、国民の祝日

うるわ

あたたか

となっている。日本が麗しい、温い、暮らしやすい社会になるには、先祖を忘れない。祖先と共に

こどく

に生きることである。決って孤独で一人ポツチでないとの豊かな心を育てる。それにはお正月、

じい

お彼岸やお盆に家族が集まることでお爺さん、お

ばあ

婆さんのお話が出る。これが精神的健康の支え、もととなる。お墓に参るとさきのような家族から

よみが

聞こえた話が蘇えってお墓が再び対話の場となる。そしてお墓まいりはやがて死に至る自分に、死は決して恐れるべきものではない。お盆、お彼

岸のお参りの日常のなかに溶けこんで、自分自身もご先祖になる身だとしてごく普通におおらかに死を戴けるのではないだろうか。

ご参詣のご尊台各位の健康増進、家内安全を祈り奉り、さらに熊谷俊亮住職の二十二日より連続四十二回目の四国八十八カ所巡拝の無事成満を祈念し奉る。俊亮住職は、がんの療養中であるにも関わらず弘法大師さまに全てを委られてのご修行である。同住職に言わせれば「お大師さまがお待ちかねですから」と仏弟子の無限の向上、報恩の極みである。最後にこのコロナウイルスが収束しますよう祈願し奉る。

令和二年三月二十日

京都府向日市寺戸町

亀光庵

沙門 土口哲光

敬って白す